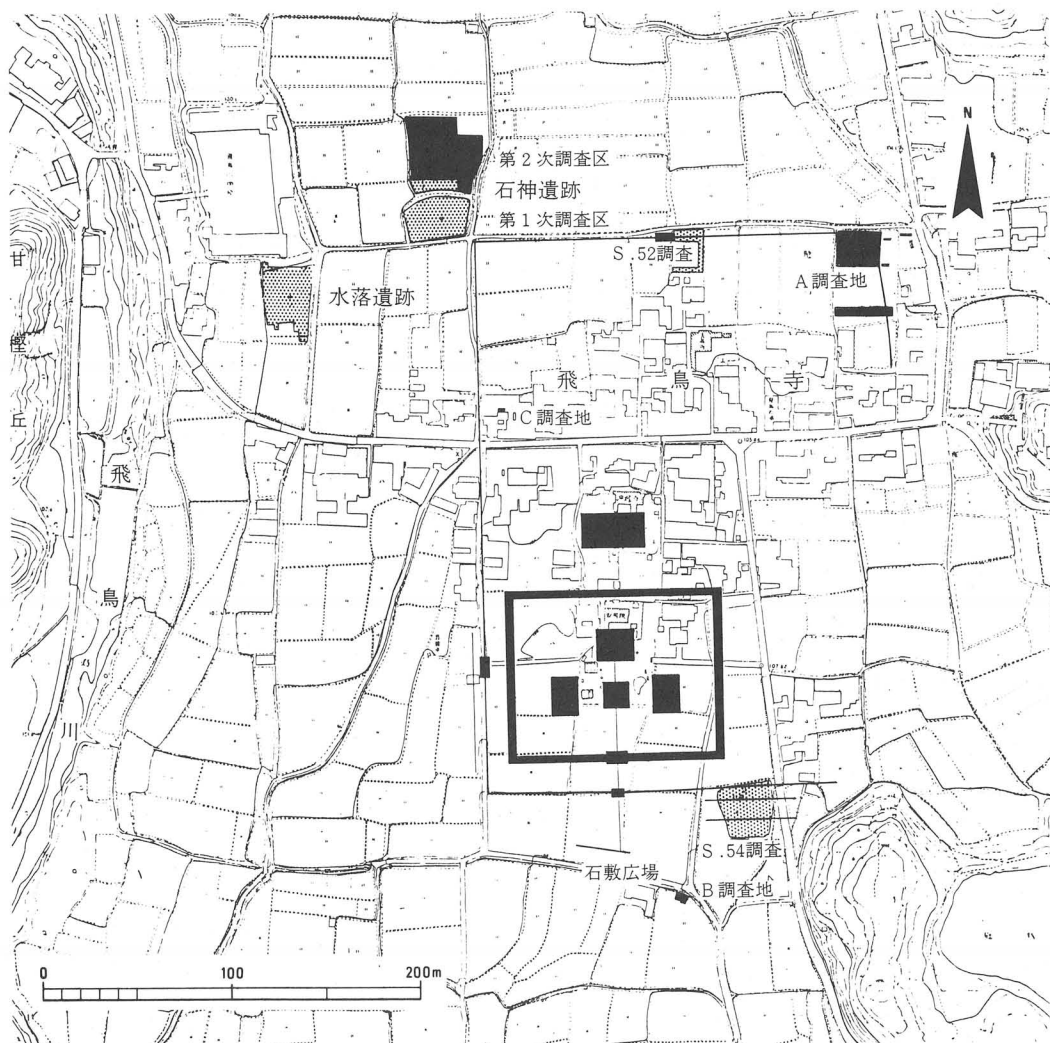


### 3. 飛鳥浄御原宮推定地の調査（石神遺跡第2次）

（昭和57年4月～10月）

石神遺跡は「須弥山石・石人像」が明治35年に偶然に掘り出されたところとして有名である。昭和11年には、同地で部分的な発掘調査が行なわれ、石造物出土地の周辺で、石組溝や東方へ広がる石敷などが確認された。その成果にもとづいて、石神遺跡は斉明朝に蕃夷の客人をもてなした饗宴場跡であろうとの推定がなされた。いっぽう、飛鳥寺の北方、雷丘東方に広がる水田地帯は、天武天皇の飛鳥浄御原宮



第4図 石神遺跡・飛鳥寺周辺調査位置図（1：4000）

の推定地でもある。石神遺跡を含めた石敷の広がりや石造物の出土が、その推定のひとつの根拠となっている。また、大和平野の主要幹道の一つである中ッ道は、飛鳥寺の西を通ると考えられており、石神の地はその実態を確かめる絶好の地でもある。このように、石神遺跡の解明は、7世紀の飛鳥を理解する上で重要な意義をもつものである。

昭和56年度に実施した第1次調査では、「須弥山石」の出土地や、それをめぐるように配された数条の石組溝を再確認するとともに、昭和11年以来、一体と考えられていた石組溝と石敷とは、前者の廃絶後に後者が敷設されていて、前者は7世紀前半～中葉、後者は7世紀後半に属することを明らかにした。また、石敷の東は石列で区切られた一段高い平坦面であり、南は東西棟の掘立柱建物とその東にとりつく東西塀で区画していることなどが判明した(概報12)。

第2次調査は第1次調査区に北接する水田において実施した。遺構検出面は南東から北西に向けて緩やかに下降し、調査区内両端での比高差は1 m弱である。検出した遺構は、(Ⅰ)7世紀代、(Ⅱ)平安時代以降、(Ⅲ)6世紀以前に大別できる。なお、第1次調査の遺構番号は、概報12での仮番号に200を加えた数に改めた。

(Ⅰ) 7世紀代の遺構 その重複関係や出土遺物などによって、A期(前半～中葉)の遺構と、B期(後半代)の遺構とに細分できる。

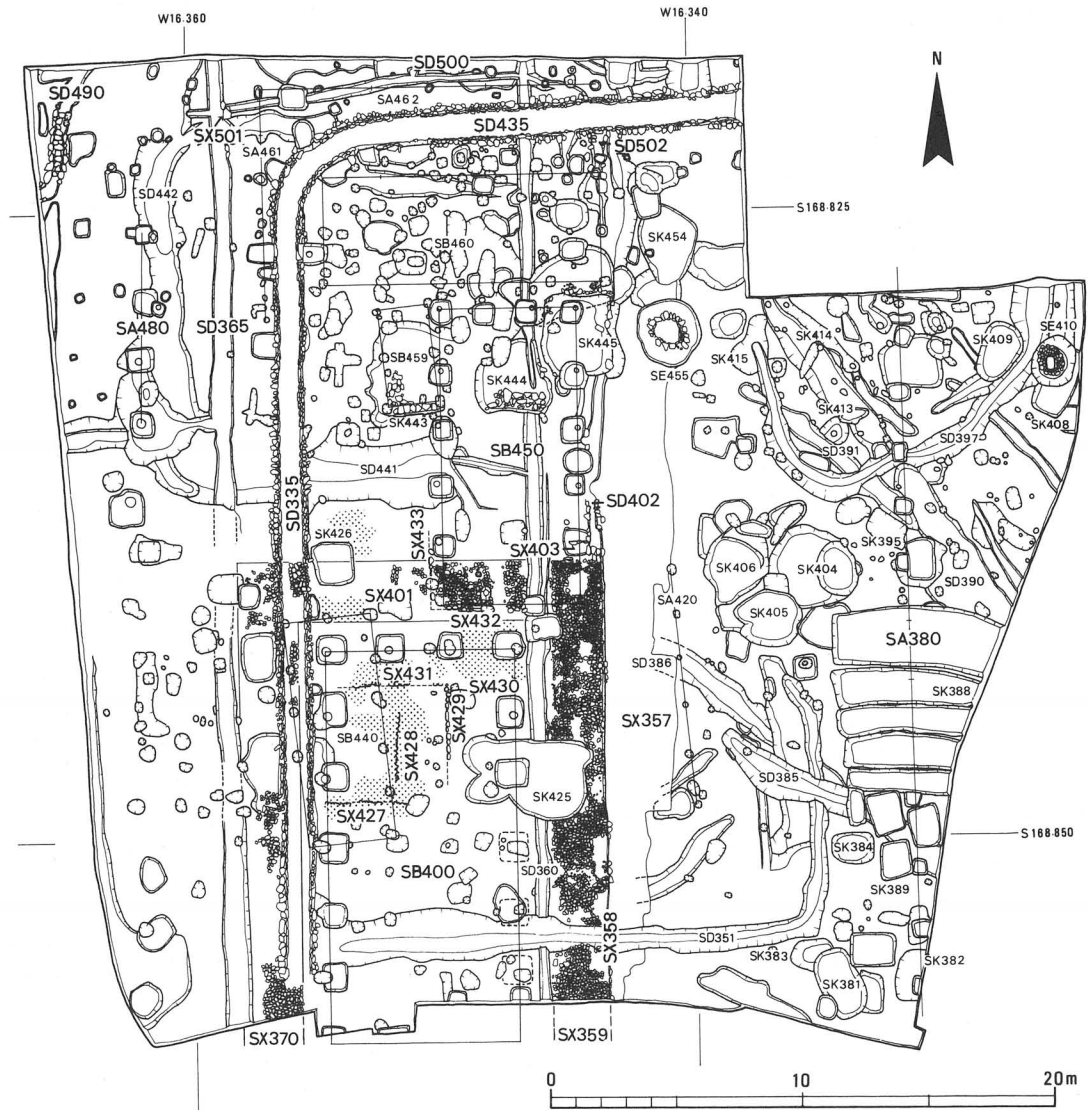
**A期** 石組大溝SD 335・435, 石組溝SD 490, 素掘溝SD 365・500, 掘立柱建物SB 450, および、これらにともなう礫敷SX 430, 石列SX 429・431・432・433などがある。また、石列SX 427・428, 掘立柱塀SA 380・480も当期に属する可能性が高い。

南北石組大溝SD 335は、第1次調査で検出したものの北延長部分にあたる。今次調査では長さ約27 mを検出し、第1次調査分と合せた長さは約60 mである。石組大溝の構築は、まず地山の砂礫層を幅約2 m, 深さ1 m前後掘り込み、その両壁沿いに20～70 cm大の自然石を横長に使って3～5段積み上げている。内幅は底で80 cm弱, 上端で1 m強をはかり、底石を敷いたあとはみられない。

SD 335は調査区北端近くで緩やかに東折し、東西石組大溝SD 435に連らなる。SD 435は長さ約18 mを検出しさらに東へのびている。SD 435の溝幅はSD 335

に比べて、10～20 cm程広くなっている。使用石材は20～40 cm大のものが多く、やや小さめである。SD 335・435の底には粗砂と細砂とが細かい互層をなして堆積しており、激しい流水があったことを窺わせる。砂層の厚さは全体で50 cmほどである。水流の方向はSD 335からSD 435である。砂層の上には暗褐色粘質土層とバラス層とがみられ、溝は一気に埋め立てられている。この埋土中からは7世紀前半代を中心としたかなりの量の土器（第6図）やメノウ製垂飾片が出土した。

石組小溝SD 490は調査区の西北隅において検出した。南西から北東へわずかに



第5図 石神遺跡第2次調査遺構配置図（1：300）

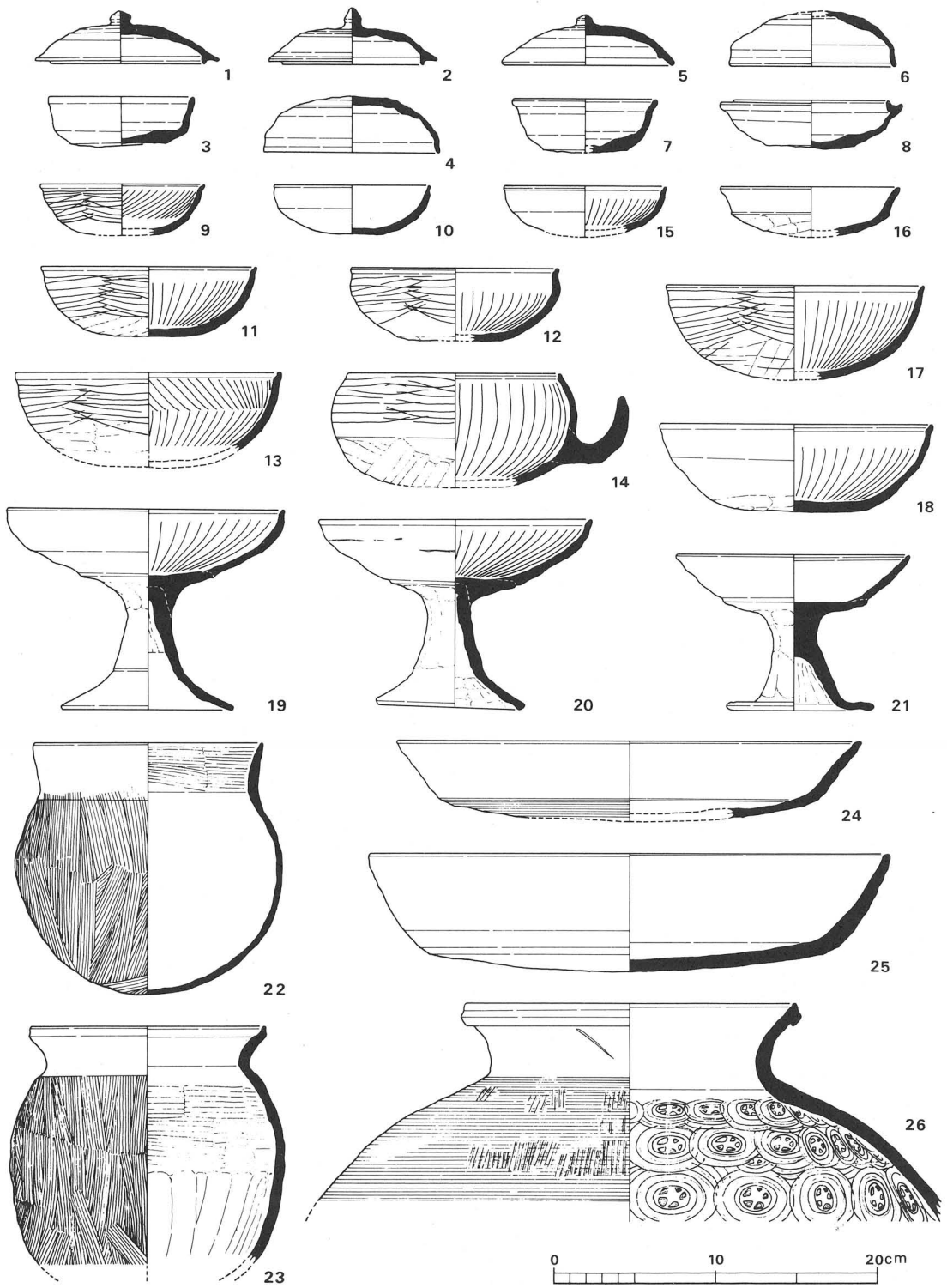
蛇行しながらのびている。溝の周囲は、底石と同じ高さまで中世の削平が及んでおり、旧状を著しく損っている。側石・底石ともに20～30 cm大の自然石を用いており、幅、深さはともに30 cm前後である。底石の上面は調査区内では南西側が低くなっているが、水流の方向については隣接地の調査の進展をまちたい。

S D 365は石組大溝S D 335の西約2.7 mにある素掘りの南北溝である。S D 335と併行しており、深さ20 cm、幅60～80 cmである。南では昭和11年調査時のトレンチが深く及んでいて不明であるが、第1次調査区と合せて総長約39 mを検出し、さらに北へ延びている。底に薄く砂が堆積しており、わずかな流水があったらしい。水流の方向は南から北である。埋土からは7世紀前半代の土器が少量出土した。

S D 500は石組大溝S D 435の北2 mにあって、S D 365と直交する幅50 cm、深さ20 cmの素掘りの東西溝である。調査区内での総長は約15 mで、東西延長部はともに中世の削平のため確認できない。埋土から7世紀前半代の土器の良好な資料を得た(第6図)。なお、S D 365との交叉部には、S D 500を堰止める位置に、面をS D 365の東側壁にあわせて自然石が遺存している(S X 501)。S X 501の存在は、A期の遺構になお細かい時期差があることを示すものであるが、石組大溝と併走する素掘溝S D 365・500の性格とともに、今後の課題としたい。

掘立柱建物S B 450は石組大溝S D 335とS D 435とで囲まれた内側にある。南北5間(12 m)、東西3間(5.4 m)の南北棟で、柱間は多少不均等であるが、桁行は2.4 m等間、梁行は1.8 m等間と考えられる。S D 335の心から西側柱筋までの距離は6 m、S D 435の心から北妻柱筋までの距離は7.5 mである。南妻柱筋は後述するB期の石敷S X 401で覆われているが、中世の溝S D 360によって破壊された部分や、S X 401が円形に不等沈下している部分を精査して柱位置を確認した。S B 450の北妻柱穴の上にかかる土壌から、7世紀中頃に位置づけられる土器片が出土し、S B 450の廃絶年代の一端を示すものと思われる。ただ、S B 450の北半は中世に著しく破壊されており、土壌も痕跡的なものであって、出土土器を絶対視しうるほど単純な様相を示すものではない。A期の遺構の造営・存続・廃絶年代については、なお詳細な検討が必要である。

S B 450の南西隅では、S B 450の柱筋に沿ってL字形に曲る石列S X 432と、



第6图 出土土器 (SD335·435:1~4, 9~14, 19, 24, 26, SD500:5~8, 15~18, 20~23, 25)

SX 433とを検出した。SX 432・433は、SB 450の外方に面を揃えており、その外側は一段低く拳大の礫を敷いている(SX 430)。SX 430は後世に著しく破壊されていて、その広がりも明確でないが、西側では石列SX 433の西方4.7 mにある石組大溝SD 335の東岸までたどることができる。礫敷はSD 335の東側石に密着し、その整地土を共有する状況が一部で確認でき、石組大溝と併存するものとみられる。SB 450の東側では、石列SX 432・433に相当する石列は確認していないが、B期の礫敷SX 357の下層で、SX 430の広がりともみられる一部を確認している。SB 450の南妻柱筋の南3 mの位置には東西方向にのびる石列SX 431があり、南に面が揃っている。この石列は、SB 450の西側柱筋を南に延長した位置で南折し、西に面を揃えた石列SX 429に連なっている。以上を総合すると、掘立柱建物SB 450は側柱位置のすぐ外側に縁石を立てて、建物内を低い基壇状につくり、建物の周囲には礫敷をめぐらし、その礫敷が建物の南では通路状に南へのびていた状況が復原できる。なお、礫敷SX 430中には、ほかに東に面を揃える石列SX 428や、北に面を揃える石列SX 427があるが、性格は不明である。

SA 380は調査区の東端で検出した南北塀である。中央部は中世の土壌SK 388によって破壊されている。ただし、北4間分は柱間が2.3 m等間であるのに対して、南3間分は北から2.6 m、2.6 m、2.3 mと不揃いである。南3間分は南庇付の東西棟建物の西妻部分である可能性もある。SA 380の年代については北4間分の柱位置が、SB 450の側柱筋の柱間のほぼ中間に対応するので、A期に属するものと考えておく。なお、SA 380とSB 450東側柱筋との距離は12.9 mである。

南北塀SA 480は調査区西端にあり、3間分を検出した。柱間は2.5 m等間である。北でやや東へ振れる方位を示す。

**B期** 掘立柱建物SB 400とSB 400の周囲にめぐらされた石敷SX 359・370・401、石敷の東を区切る縁石SX 358、縁石の裏込めSX 357、石敷東北隅の石組施設SD 402、SX 403、SD 402の北延長SD 502などがある(写真2)。

SB 400は、本次調査区でその北半を、第1次調査区で南半を検出した南北6間(柱間2.6 m等間)、東西3間(柱間2.5 m等間)の南北棟建物である。SB 400の南半部は、第1次調査では中世の東西溝SD 351などにより、石敷を含めて広く

壊されていて、その下面で精査したものの、埋土に黄色粘土の混った柱穴数個を検出したにとどまり、建物にはなしえなかった。しかし、北半の本調査区では、A期の礫敷や整地土層の残りが良く、その上面で一辺1 m余の方形柱掘形と、黄色粘土を含む柱抜取穴が明瞭に検出された。そこで前調査区の黄色粘土を含む柱穴の位置を図上で検討した結果、北半の柱抜取穴と柱筋・柱間ともに一致することが判明し、西側柱列と南妻柱の一部について、第1次調査区を再調査して建物規模を確認したものである。建物の周囲には10～20 cm大の河原石が敷きつめられており、下層の石敷と同様に、後世にかなり破壊されているものの、ほぼその広がりを復原できる。西側の石敷SX 370の東辺はSB 400の西側柱筋から1.1 mへだてた位置にある。北側の石敷SX 401の北辺と東側の石敷SX 359の東辺とは各々の柱筋から3.5 m外側にある。したがって、西側と東側の石敷がSB 400に対して対称的にめぐっていたとするならば、石敷の幅は2.4 mに復原できる。西側の石敷SX 370は、一部がA期の石組溝SD 335を埋めたてた上に敷設されており、部分的に不等沈下をおこしている。第1次調査で検出した石敷SX 327は、その南にある5間×1間の東西棟建物SB 325とSB 400との間(約10 m)に広がっていることになる。また、SB 400の東西側柱筋はSB 325の中央3間分の柱位置と対応しており、SB 325の東にとりつく東西塀SA 305をも含めて、これらB期の建物・石敷は一連の計画のもとに造営されたものと考えられる。

石敷SX 359の東は石列SX 358で区切られており、それ以東はこの石列を縁石として、石敷面よりも20 cmほど高い平坦地に造成されている。この段差の造成にあたっては、縁石SX 358から東へ幅3 mにわたって、バラスを敷いて裏込めとしている(SX 357)。このバラス敷は石敷SX 359より北へ延びているが、中世の破壊が著しく、北限は確認できなかった。縁石SX 358は、石敷SX 359以北では石組溝SD 402の東側石に連らなる。SD 402は旧状を著しく損っているが、内幅20 cmほどの南北石組溝とみられ、石敷SX 359・401に伴なう排水施設と考えられる。SD 402の北延長上にあるSD 502は、わずかに底石3枚と西側石2個とを残すのみであるが、SD 402と一体の施設であろう。SD 502は石組大溝SD 435より北へはのびず、その底石は、SD 435の南側石の直上に密着している。このことは、

S D 435がB期にも部分的に排水溝として機能していたことを示唆しているが、その確認は今後の課題にしたい。

石列S X 403は石敷S X 401の北に接し、これに併行してのびる2条の東西石列である。南側の石列は南に面をそろえており、S X 401の北側を画するものである。北側の石列は北に面をそろえている。いずれも旧状を著しく損なっており、その広がりや性格の詳細については明らかでない。

(Ⅱ) 平安時代以降の遺構 重複関係や出土遺物から、少なくともⅠ～Ⅳの四時期に細分できる。

Ⅰ期は黒色土器を伴う遺構で、掘立柱建物S B 440・459、塀S A 420、土壇S K 425・426がある。これらは調査区の南に集中している。S B 440は2間×5間の南北棟、S B 459は1間×2間の南北棟、S A 420は5間の南北塀で、いずれも主軸が北で西へ10°強振れている。Ⅱ期は13世紀代の瓦器を伴う遺構で、石組の井戸S E 410・455がある。S E 410の底には曲物を据えている。Ⅲ期は14世紀代の瓦器を伴う遺構で、掘立柱建物S B 460、塀S A 461・462、溝S D 441・442、石組土壇S K 443・444・445などがある。これらは南と西とを素掘りの溝S D 441・442で区画した一単位の宅地を構成する可能性がある。また、調査区の南端で検出したL字形に曲がる溝S D 351や、北東の隅で検出した弧状にめぐる溝S D 397もほぼ同時期のもので、同様の性格をもつものかもしれない。Ⅳ期の遺構には、これらが廃絶した後に掘られた土壇群S K 388・389・483がある。土壇群は調査区の南東部と南西部に集中しており、内部にバラスを詰め込んでいる。なお、南西部の土壇群S K 483は上層で検出したもので、遺構図では省略している。

(Ⅲ) 6世紀以前の遺構 弥生・古墳時代の遺構がある。主に調査区の東部で検出した。弥生時代のものとして、土壇S K 381～384・395・408・409・413～415などがある。調査区東北隅のS K 408が1.5×2.8mの整った隅丸長方形を呈するほかは、いずれも一辺1～2mほどの不整形な土壇であり、中央部へ次第に深くなる特徴がある。S K 383からは弥生第Ⅰ様式土器が出土している。古墳時代の遺構としては、自然地形に沿って東南から西北へと流れる斜行溝S D 385・386・390・391および土壇S K 404～406、S K 454などがある。S K 405からは、土



師器の高杯を主体とする5世紀代の土器が多数出土している。

**まとめ** 今回の調査では、第1次調査で検出した7世紀前半～中葉の基幹水路である石組大溝SD335が、第1次調査区南端から60m北で東折し、SD435に連なることを確認した。この基幹水路は、自然地形に従って流れるばかりでなく、部分的にはSD435のように旧地形のやや高い方向へも敷設されている。また、石組溝の示す方位は、建物方位とよく合致して、ほぼ真南北方位を示しており、何らかの地割にのっとって計画的に設置されたことが容易に想像できる。第1次調査区の南西隅では、この基幹水路の北と西に入念な工法でつくられた2条の石組溝がとりついており、この基幹水路から取水、ないし水路へ排水するための溝と考えられている。「須弥山石・石人像」が、この付近に設けられた園池的施設と関連するものとするならば、その園池的施設の主体は、第1・2次調査区の西方にあるものと推定できよう。今回の調査区の北西隅で検出した蛇行する石組小溝SD490もまたそれに関連する可能性がある。また、石組大溝SD335・435の東・南方で検出した掘立柱建物SB450は、それらA期の基幹水路と一体のものと考えられる。掘立柱建物内を低い基壇状につくり、周囲に礫等を敷きつめる工法は、飛鳥稲淵宮殿遺跡や飛鳥板蓋宮伝承地などで認められており、飛鳥の宮殿遺跡では一般的な工法である。あるいは掘立柱塀SA380はこの時期の施設を区画するものかもしれない。

7世紀後半になると、石神遺跡における土地利用形態は一変する。A期の建物は廃され、基幹水路は埋め立てられる。南は東西棟SB325とその東にとりつく東西塀SA305で区画され、その北方に南北棟建物SB400が建てられる。建物の周囲はA期と同様に河原石を敷きつめており、石敷の東方には石敷面よりも一段高い平坦地が造成される。この平坦地は第1・2次調査区の東・北へと伸びており、かなりの広がりがある。この平坦地で7世紀後半期の遺構は全くみつからない。このように飛鳥寺北方一帯では、7世紀後半期に大規模で、かつ7世紀中葉以前の土地利用を大きく改造する造営の行なわれたことが明らかになった。しかも、この時期の掘立柱建物・石敷も、飛鳥の宮殿遺跡で特徴的に認められる工法で造営されていることも注目されよう。遺跡の性格については、今後、周辺地域の調査を継続的に行なうなかで明らかにしていきたい。